

アラスカ遠征報告

1 経過報告

派遣委員長 小野 龍 弥

本計画は当初、技術研究会現役の春期合宿として1970年12月に、計画が提出されたのであるが、アラスカハイウェイ沿いの山々を選び、遠征費用、日数共に軽便で、現役の海外初合宿にふさわしいものであった。

その頃OBは前述のように、南氷洋南ジョージア島への1972年度遠征実現のため奔走しており、入国が可能となれば、1年後のこの計画に現役も参加することになっていたが、2月25日をタイムリットとしてOBがアラスカ隊に参加するよう決定した。

現役にはこれを予想して、アラスカに於ける未登峰を含んだ地域を再検討せしめておいたが、Mt. Hayes 周辺は、その南峰が未登であったし、今回Mt. SENRIと命名した無名峰群など興味深い山域であったので、之を目的地とした。

此の目的地は、飛行機をチャーターしなければ行けない等、計画そのものが膨脹したので、大学に主管を移し関西大学アラスカ遠征隊が承認された。

71年3月派遣委員会が発足し、会長には杉原弘人探検部長教授、顧問には栗駒正和学生部長教授並に横田健一探検部顧問教授が御引受け下さり、探検部を代表して私が委員長となった。

派遣隊員は、苗村元、安沢寛、松本繁文の現役3君は当然決っていたが、OB側の選出は困難であった。結果的には、南ジョージア計画の中心メンバーであった中野力、宮本義海、両君が隊長の任に当たってくれたが、南氷洋の島を断念してアラスカへ向った両君の心中は察して余りあることであった。

特に中野君は、1965年ペルーアンデス隊の山岳隊員として豊富な遠征経験があり、アラスカ隊としては最適であったが、準備段階の3月御尊父の御逝去に合いその喪中にもかかわらず、学内外の接衝を遂行してくれたことは忘れられない。

斯様にして遠征隊は誕生し、本部は杉原教授の研究室におき、派遣事務は学生課の大津健造氏がお世話下さり、報道は大阪読売新聞社に御協力いただいた。

遠征において最も苦勞なことは資金調達であるが、これは隊員の自己負担を基盤として、当初の計画になかった、氷河への飛行機チャーター料その他を、本誌『アラスカへの道』の購読料として予想額を越える御支援を得て充当することができた。

他にも登山装備、食料、医薬品を寄贈していただき万全の準備のもとに遠征できたことは幸いであった。

登山中のことは隊員の報告に譲るが、6月9日多数の御見送りの中を、大阪空港を飛び立ち、8月10日には全員無事帰阪した。

技術研究会として初の海外登山は無事成功裏に終了致しましたが、之は偏りに大学関係者の御協力と御支援によるものであり、厚く御礼申し上げます。

2. アラスカ案の誕生まで

苗 村 元

〇 探検部山岳技術研究会 “私はこの名称の意味も考えずに入部した。このとき探検的登山というのが自分の好みにあっているように思えたが、北アルプスに登ることがそれに入るかどうかは考えもしなかった。しかしこの単純な疑問は次第に変容しつつ私を取り巻くようになっていく。本当のところ特別な意味はないようであるが、やはり山行におけるパイオニアスピリットとその実践、これだけは切り離せないものであるらしい。このことから必然的に海外の山が目標となってきていた。事実アンデス遠征をやり、次期遠征が待たれていた。私の入部時から何回か計画を聞くことがあった。また現役も狭い国内での活動でパイオニアワークを云々するには少なからず窮屈さを感じていたから、やはり遠征が一つの突破口であると考え、これに期待していた。しかし具体的行動に移ることもなく、発表すらされないまま時は過ぎた。また現役自身も漠然としてではあったが、それぞれに企画をもっており、各人がその計画の実現を目指していた。国内合宿もその条件に合ったものとして